

### 3 花 き

項 目	作 業 内 容
(1) デルフィニウムの栽培管理	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○デルフィニウムの栽培管理</li> <li>○シクラメンの育苗管理</li> <li>○7～8月出荷用トルコギキョウの育苗</li> </ul> <p>&lt;シネンシス系‘さくらひめ’&gt; -切り花-</p> <p>2月の生育ステージは、9月中旬定植の2番花が出蕾期～花茎伸長期（採花予定は3月下旬～）になる。以下の栽培管理を行う。</p> <p>ア 水、施肥管理</p> <p>土壌が乾きすぎない程度に定期的にかん水するが、水分が多すぎると茎が軟らかく品質が低下するため留意する。施肥は、有機配合肥料を3～4週間ごとに窒素成分で5～6kg/10a施用し、肥切れを起こさないようにする。</p> <p>イ 温度管理、葉かぎ</p> <p>日中の換気温度は25℃に設定し、夜温は10℃を確保する。</p> <p>適宜下葉を除去し、株元の通気性を良くすることで灰色かび病等の病気を予防する。なお、葉かぎの範囲は、最終的に地際部から約10cmの高さまでを目安とする（写真1）。</p> <p>ウ 電照管理</p> <p>日長延長を目的に、白熱球では17：00～21：00、LED赤色光では17：00～19：00を目安として管理する。電照終了は2月下旬とする。</p> <p>-鉢物-</p> <p>ア かん水、施肥管理</p> <p>日照量が多いとしおれやすいため、乾かさないようにかん水する。肥料が切れると葉が黄化するため、IB化成肥料を4号鉢で毎月3粒/鉢施用する。</p>



写真1 下葉を除去した株元の状況

項 目	作 業 内 容
(2) シクラメン の育苗管理	<p>イ 温度管理</p> <p>10 月下旬に定植し 4 号鉢で 3 月に出荷する場合、最低温度 5℃で管理する。4 月に出荷する場合は無加温で管理する。</p> <p>&lt;エラータム系&gt;</p> <p>2 月の生育ステージは、2 番花の採花期である。以下の栽培管理を行う。</p> <p>ア 水、施肥管理</p> <p>2 番花の開花期となる作型では、花穂の徒長や軟弱化を防ぐためにかん水量を抑え気味にする。ただし、過度の土壤乾燥は 3 番花の萌芽、伸長を抑制するので、肥料分を吸収できる程度の土壤水分量を保つ。土壤表面が乾いたら少量のかん水をこまめに実施するよう心がける。</p> <p>また、採花後の株は吸肥力が低下し、低温期でもあることから追肥は通常より控えめとし、有機配合肥料を 2～3 週間ごとに窒素成分で 3～4 kg/10 a 施用する。</p> <p>イ 温度管理</p> <p>日中は換気目標温度を通常の 25℃から 20℃程度まで落とし、側窓換気によりハウス内の温度を低下させ、堅く締まった切り花に仕上げる。日中の温度が上がらないときは、循環扇や暖房機の送風を稼働させて空気の対流を図る。また、3 番花の萌芽を促すために夜温は 12℃～14℃を確保する。</p>
	<p>12 月にセルトレイには種した中鉢 (5 号鉢) 生産用のシクラメンは、70 日後の 2 月には本葉が展開し始める (写真 2)。</p> <p>施肥管理は、窒素：リン酸：カリ比で 2：1：2 に調整した液肥を、窒素成分で 50 mg/L (50 ppm) 程度の濃度に薄め、1 週間に 1 回程度施用する。幼苗期に濃度の高い液肥を施用すると、本葉の展開が早く葉色も濃くなるが、その後の生育が阻害され奇形葉の発生が多くなるため、本葉がゆっくりと展開するような肥培管理に努める。</p>



写真 2 本葉の展開を開始したセル苗

項 目	作 業 内 容
<p>(3) 7～8月出荷用トルコギキョウの育苗</p>	<p>なお、温度管理は、夜温を 15℃程度とし、昼温は 25℃で換気する。</p> <p>また、ミニシクラメンの生産では、1月上旬～2月上旬がは種適期となるため、5号鉢生産と同様の播種・育苗管理を行う(12月の作業管理を参照)。</p> <p>ア は種用土の準備</p> <p>は種用土は保水性・排水性の良い、無病である市販の専用用土を利用する。育苗専用の緩効性肥料(マイクロロングトータル)を用土1L当たり5g混合しておくとう育苗中の液肥管理の省力化が図れる。</p> <p>イ は種及びは種後の管理</p> <p>は種は、288穴のセルトレイに市販のコーティング種子を1～2粒ずつ落として行う。トルコギキョウは好光性種子であり、発芽には光が必要なため覆土はしない。は種後はできるだけ早く噴霧器を用いて種子のコーティングが割れるまで吸水させる。吸水させたコーティング種子を再度乾燥させると割れにくくなり、発芽不良の原因となるので気を付ける。</p> <p>発芽適温は25℃前後と高温で、無加温施設内では温度不足による発芽遅延や発芽の不揃いが問題となる。そのため、ビニルトンネルの被覆や電熱温床線を設置し、発芽まで適温を確保する。なお、発芽後は20℃前後で管理する。</p> <p>は種後から本葉展開時までは用土の表面を乾かさないようにかん水し、また、この時期までは植物体が小さいので噴霧でのかん水が望ましい。その後は土壌表面が乾き気味になれば適宜かん水する頻度とする。育苗後半には肥料切れを起こすことがあるため、葉色を見て薄めの液肥を施用する。なお、降雨日が多く日照量が少なくなると軟弱な生育となり苗立枯病等の発生を助長するため、ハウスの換気等を行う。</p>

(作成 農林水産研究所)